日刊工業新聞
年月日 26 11 20 ページ 27 NO.

科学技術の潮流
JST研究開発戦略センター
362

AI共生、対話と目的を



科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター
フェロー（システム・情報科学技術ユニット）
小崎 成治

静岡大学大学院自然科学研究科博士課程修了、民間会社で通信システムなどの研究開発に従事。25年から現職。通信分野およびインタラクション分野の研究開発戦略立案を担当。博士（工学）。

AI（人工知能）にCM）が運営するCHによる効率化や自動化のI（HCI分野の総合検討が、あらゆる分野的な会議）やCSCWで進んでいる。AIは（社会や集団での協人々の利便性を向上させる一方で、過度な依存は人間の知性や能力を減退させるとの懸念もある。HCI（ヒューマン・コンピューター・インタラクション）分野の主要国際学会での議論から「AIとの付き合い方」のヒントを探る。

意図保ち価値を

国際計算機学会（A論から、主要な動向を抽出した。CHIではAIによる自動化が人間の思考力や達成感を低減するリスクとその対応、CSCWでは組織やコミュニティーの中でのAIの位置付け、IUIでは人間が「か」という共創デザイン（社会や集団での協調）、IUI（ユーザーインターフェースの知性化）での最新の議論から、主要な動向を抽出した。

同分野の動向が示唆するのは、技術のパフォーマンスを競うフェーズから「人間や組織の意図を保ったまま、いかにAIをさまざまなシステムに組み込むか」という共創デザインの時代への移行である。代行率や効率性ばかりを指標とするのではなく、人間とAIが共存し、意図に沿って持続的に価値を生み出せるかが、システム設計の重要な基準となる。

道具から共同体へ

もう一つの着眼点は、AIの位置付けの変化である。AIは人間の作業の効率や生産性を高める「道具」から、相談に乗る「パートナー」へ移行してきている。今後は、人間と「共生する共同体」の一員として、社会全体のウェルビーイングに貢献することが望ましいが、リスクや懸念も多い。

AIの位置付けと利用価値・意義の変遷

	過去	現在	将来
AIの立場	道具	パートナー	共生する共同体
価値・意義	効率性・生産性	＋相談・アドバイス	＋ウェルビーイング

（著者作成）

こうした変化や学会での議論から、AIとの付き合い方、その方向性が見えてくる。重要なのは、AIが身近な存在になっても人間の自律性と協調性を確保することである。システムをデザインする側と、ユーザー側の双方に留意すべき点がある。

デザイン側には、AIの提案に対し根拠や判断プロセスを確認できるなど、十分に対話できる仕組みを備え、ユーザーによる意思決定がなされるよう導くことが求められる。ユーザー側はその仕組みを通じ、利用目的を明確にした上で、AIの提案が自己や組織の意思に沿ったものかを点検する姿勢が欠かせない。

今後は、あらゆる人がさまざまな場面でAIから情報提供や提案を受けることが増えていく。その際に私たちに必要なのは「対話」と「目的」を失わないことであり、それがAIと健全に共生するための確かな指針となる。

（金曜日に掲載）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社